おちほ

第92号 平成31年3月20日　発行　　社会福祉法人　椎の木会　**落穂寮**　発行者　太田正則
TEL 0748－77－2299　FAX 0748－77－5588　http://ochiho.noor.jp/

福は内!!

鬼は外!!

節分に込める想い　無病息災

落穂寮では、以前は日中活動がない日曜日にゆっくりと豆まきをしようと、二月の第一日曜日に節分をしていた時期があります。節分に対しての意識も年間の季節行事という意味合いが強く、利用者さんに季節を感じて楽しんでもらえればいいかと思っていたように思います。

しかし、節分と関係があるのかないのか…利用者・職員が怪我や病気になることが多い年があり、その年以降、寮内での節分に対する想いが変わり、毎年2月3日の節分の日に必ず実施するようになりました。

このようなエピソードを利用者さん達は知りませんが、今年も（福男）の幸典さんと真也さん、（福女）の紀代さんを中心に、これからの一年も怖くて鬼がやって来れないくらい力強く豆まきをされ、みんなで厄除けを願いました。

ドイツ旅あれこれ

理事長　山下陽一

ドイツ鉄道（DB）

この拙文を読んでいただいている皆さんには何もお土産をお分けしていないのに、わたしの自慢話を聞いていただかなければなりません。恐縮です。

昨年（二〇一八年）九月末、ドイツ旅行をしてきました。日本とまったく異なった文化圏ですから、一度の旅行でいろんな感動や失敗を体験してきました。DBは日本のような新幹線こそ走っていませんが、よく発達していて旅行者にとっては安く手軽な移動手段です。

ライプチッヒからドレスデンへの旅行中、車内検札がありました。すでにご存じでしょうが、DBの駅には改札口がありません。車内検札のみです。そこで日本では考えられないようなことがありました。検札員は「大阪のおばちゃん」風なのです。DBの制服制帽なのですが、空いた椅子にかけて周囲の乗客と**おおばな**しをしているのです。ドイツ語はできませんから何が話題になっていたのか解かりませんが、会話に「カプート」と聞こえたので、「しんどうて、やってられまへんわ」ぐらいのことだったのでしょうか？そのおばちゃんが私たちのところへきて検札しました。切符を見るなり、「あんたこんな損な切符の買い方せんとき」こんなところでしょうか。そして他人の切符を見せて「これ見てみ！」といっているようです。周りの乗客に「この人にもっと安い買い方があるのを説明したって」とおばちゃん。周りの乗客は苦笑していましたが、後ろ座席に座っていた家族のうち、女子高生がやってきて、英語と絵を書いて説明してくれました。それによると往復・時間指定・二人の旅行条件を設定すれば正規料金の半額になるということでした。彼女の家族との別れ際に「このメモを駅窓口に見せて買うから」とお礼をいいましたが、彼女に伝わったのかニッコリと笑顔が帰って去って行きました。

九十五カ条の城教会へ

ライプチッヒからDBで北へ約一時間半もすればヴィッテンベルクに到着します。ここは中学の歴史の教科書に出てくる宗教改革の発端の地です。一五一八年ルターが九十五カ条の提題を張り出した城教会を訪ねました。城教会の正面銅板扉一面にそのラテン語の文面が刻まれていました。内容は「免罪符」（贖宥状）の神学上の有意性についてヴィッテンベルク大学での討論を呼びかけたものです。（このヴィッテンベルク大学は「ハムレット」が留学しました！）

討論会は無視されて行なわれなかったのですが、無名の地方大学教師の　呼びかけは瞬く間に燎原の火のごとくヨーロッパ全土に拡がって、カトリック教会の信仰の伝統と体制に激震を与えることになりました。

しかし、田舎じみている当地を訪問してまず感じたのは、五百年前、ルター家族の生活の場所だったということでした。彼の妻や子どものある家庭生活がここで営まれていたのです。

子どもは六人生まれたのですが、そのうち長女は生後八か月で、次女は十三歳で亡くなりました。子を亡くした親の深い悲しみは古今東西変わりはないはずです。この夫婦もその悲しみに耐えていったのでしょう。彼は世間にあっては暗殺さえされかねない情勢の中、家庭内では子ども思いのパパだったようで、どこにもある極めて一般的で平和な家族生活が営まれていたのです。

バッハ訪問

ルターの没後百七十七年、ヨハン・セバスチャン・バッハ（J・S）が活躍した場所がライプチッヒにある聖トーマス教会です。わたしはライプチッヒ滞在中トーマス教会の早朝礼拝（サービス）に参加することができました。奏楽と合唱団とオルガン演奏で礼拝を進めていましたが、オルガンはJ・Sが演奏していたものなのでしょう、教会の全空間に荘厳な音を響かせていて、鳥肌が立つ思いをしました。

J・Sの後妻のアンナ・マグダレーナが家庭生活にあったJ・Sの様子を書き記しています（『バッハの思い出』山下肇訳・ダヴィッド社）。

J・Sは最初の妻と死別して、アンナを妻として迎えるのですが、アンナはJ・Sとは年齢が十三歳も離れ四人の子どもの母親になりました。『思い出』のはしばしにJ・Sを本当に尊敬し愛していたことが感じられます。J・Sも大変子煩悩だったようですが、子育てにはやはり手を焼いていた様子がうかがわれます。特に前妻の子長男のフリーデマンにはホトホト難儀していたようです。アンナはある日のことを次のように書いています。長男が嘘をついたことで父親の怒りに触れました。アンナのもとに泣きじゃくりながらやってきました。「パパに謝りなさい」といっても「こわい」といって謝ろうとしません。アンナは長男と一緒に「ごめんなさいをいいにきましたの」といってJ・Sにとりなすのです。長男はパパの膝で泣きじゃくり、パパもアンナともに泣いたのでした。レンブラントの老父に跪いて詫びる「放蕩息子の帰還」が思い浮かびました。

ルターもJ・Sも歴史的な偉業をなしとげた極めて稀有な存在の人たちです。けれども、日常の雑事や妻や子どもを亡くした悲しみに耐えていった、それこそ私たちと全く変わらない生活があって、歴史上の偉業をなしとげることができた、とそう感じさせられたのです。

（二〇一九・一・三一）

備えることの難しさ

寮長　太田正則

どこまで？

新たな年を迎える事が出来ました。皆様、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

昨年は年末にも発表がありましたが、本当に「災」の多い年でした。ただ、幸いにも落穂寮の敷地内では「災」というほどの影響もなく、新しい年を迎える事が出来た事は、大変ありがたいことだと実感しています。と言うのも、諸事情により自宅の台所だけが十日ほど使えませんでした。しかし、日常生活のほとんどが支障なく過ごせたにもかかわらず、食事だけは大変不便な状況で、ガスは使えず食器を洗うのもままならないため、インスタントや出来合いのもので済ませるなど、避難生活とはこういう事かと思いながらの生活でした。たった十日ほどの出来事だったにもかかわらず、終わりのころにはかなりのストレスがたまり、心身共に疲労がたまっているのが分かりました。地震や大雨、洪水などで避難生活を余儀なくされている方々はこれ以上の不便な生活を長期間に渡って強いられておられるのだと思うと、一日も早い生活環境の改善と復興を願うばかりです。そして、このような生活環境がこの敷地内で起こり、利用者・職員に求めなければならない事態が起こった時、果たして今の備えで対応できるのかと、とても心配になりました。そういう意味では、一年何事もなく過ごせたことに感謝しつつも、いつ起こっても対応できるように、改めて確認し、準備に努めなければならないと思いました。しかし、ここで問題となってくるのが、何をどのように想定して備えるのかです。前号では障がい福祉サービスにおける生活支援において、一人一人の生活を支えるには想定できる事態に備えた支援体制をどのように構築するかを考えることが必要だと書きました。地域で生活する方々の長期的な視点での取り組みです。一方、入所施設で生活する方々の短期的な視点での取り組みとして、想定し得る災害の種類とその時の対応について、一つ一つマニュアルを作成し、訓練し、非常時に備えることが求められますが、どこまでを想定するかにとても難しさを感じます。また、当然訓練が必要なことはわかっているのですが、日常生活にはない出来事が大変苦手な利用者さんにとっては心身ともに負担が大きすぎることや、設定された場面での取り組みは、現実に起きたときの行動として学習されることは難しいため、利用者さんが不安定になるリスクの割に効果が期待できないことが予測されます。今年、豪雨災害や地震による土砂災害などを想定して緊急避難道路の整備や側溝の改修を行いますが、非常電源や生活用水、非常時の支援者確保など、最低限環境だけでも利用者さんの負担が軽減できる体制を取らなければならないと思っています。

共有と提供

新年一月二日、「下町ロケット特別編」の放送がありました。見られた方もおられると思いますが、日本の農業を守るために、利益の追求に走るのではなく、使う人のために、使う人の立場で、目線で、心に寄り添ってトランスミッションの開発に取り組み、まさに血の滲むような努力によってさまざまな困難を乗り越えて出来上がった製品の特許技術の一部を、ライバル企業にも関わらず、日本の農業の未来のため、そこに従事する農業従事者のために提供することを決意し、実行するという物語でした。自社で開発したノウハウではあるけれども、それを提供することで多くの人を救う事が出来るという、競争社会では考えられない利益を度外視した慈善事業のような決断でした。そして、福祉に携わっている者として、この考え方は違和感なく受け入れる事が出来ました。それは、私たちが提供している支援についても同じようなことが言えるのではないかと思うのです。支援を必要としている人は一人一人生まれた環境も育った環境も、性格も、特性も全く同じ人は一人もいません。同じ障害名が付いていても、同じ支援方法でよいとは限りません。生活の中からいろいろな情報を得て、その人に合った支援内容を分析して提供します。そうして培われた多くのノウハウを汎化することで、お互いの事業所で困難と思われる方の支援を可能にし、支援の質を上げることにもつなげる事が出来ます。また、支援を必要としている多くの方にそれらを提供することで、今の生活を継続することが可能となります。私たちが共有できるものは、部品を作るように図面一枚で全く同じものが出来上がるわけではありません。しかし、同じような状況で困っている方がおられるかもしれません。違う図面であっても、アプローチする視点は同じかもしれません。二十四時間、三百六十五日の関りだからこそ、気づきにつながる出来事も多くあります。佃製作所が佃プライドを掲げたように、自分たちが培ってきたものを掲げて、支援を必要としている方々につなげることができればと思います。そして、それが私たちの役割でもあると思うのです。

（二〇一九・一・一〇）

レクリエーション大会2018

去る10月14日にレクリエーション大会を開催しました。

今年は少し変わった取組みができないか!?と徒競走を借り人競争に変えて、利用者さんと来訪者の皆様が一緒に取り組む内容になりました。

お天気にも恵まれた秋晴れの中、スタートの合図と共にカードを引き、そこに書かれた仮装をしている人を探して一緒にゴールします。仮装においては、招待者の方から保護者・旧職員まで、参加して下さった方が積極的にご協力いただけ、盛り上げてくださいました。中には、学籍時代に担任だった先生との再会や、幼少期を知って下さっていた地域の方との数十年ぶりの再会など、とてもドラマチックな出来事もありました。

昼食後は、玉入れ、ボール運びなど趣向を凝らした種目です。玉入れもボール運びも利用者さん仕様で考えてあるので、各々のペースに合った楽しみ方をされていました。近年、利用者さんのご兄弟も子どもさんを連れて参加される事が増えてきているので、小さいお子様も安心して楽しまれていました。

最後は、みんなのお待ちかねのダンスの時間です。今年は実習生とのご縁で、湖北のよさこいチーム「花びよりあかさたな」さんをお迎えして、舞を披露してもらいました。

綺麗な着物を着て迫力満載にぴったり揃った舞には、利用者さんも目が釘付け状態でした。利用者さんたちも〝早く自分も踊りたい〟とワクワクした様子で見ておられ鳴子などを使って一緒に踊り楽しみました。

今年のレクリエーション大会は、利用者さんと参加者との距離が近く感じられる内容で、例年に比べると一体となって楽しめている感じが強かったように思います。

ぜひ皆さんも、来年は遊びに来てみませんか？

歌って踊って落穂寮のクリスマス

「ハッピーメリークリスマース！」と元気に陽気ににぎやかに、今年も落穂寮のクリスマス会が12月23日に行われました。お昼前には、利用者の皆さんは綺麗な洋服に着替えてもらって多目的ホールに集合。まずは最初のお楽しみ、クリスマスランチのスタートです。

さて、今年のメニューもクリスマスらしく、いつのも昼食よりも、手の込んだ、美味しい料理をお炊事の職員さんが用意してくれました。具がリッチになったサラダに温かいスープ、フカフカのパン、そしてメインは絶妙な焼き加減の鶏のもも肉。付け合わせのソースもバッチリです。見ているだけでテンションが上がります。シャンメリーをコップに注いで、いざ、「乾杯！」「いただきます！」美味しい食事は人を自然と笑顔にします。利用者さん、職員もニコニコと箸を進めます。すぐに完食してしまう人、マイペースで楽しむ人、それぞれの楽しみ方で、クリスマスらしいランチになりました。

昼食が終わると午後からのお楽しみ、「クリスマスコンサート」の開始です。今年は京都から来て下さったミュージシャン、「ターボ」さんが演奏を披露してくださいました。このターボさん、キーボードの達人で「スーパーキーボーディスト&ヴォーカリスト」として音楽活動をされているプロフェッショナルな方。なんと、サザンオールスターズのライブでも演奏されたという凄い人です。そのキーボードからは何百という音色が出せるそうで、ピアノからトランペット、ギターやドラムの音まで何でございで、これにはみんな目をパチクリ。キーボードってすごいなぁー。さてさて、曲が始まると、クリスマスソングはもちろん、ロックナンバーには利用者さんも職員もノリノリ。音に合わせて体を動かす利用者さんにターボさん加わって、ステージはカオス状態、そこはまるで「ディスコ落穂」が出現したかのように、踊ってフィーバー歌ってフィーバーの熱い熱気に包まれました。本当に時間を忘れて楽しませていただきました。やっぱりプロはすごいなぁ。

コンサート終了後は少し休憩しておやつタイム。みんなでケーキを頂きました。今年はケーキの種類が色々で、いちごショートに、チョコレート、モンブランにチーズケーキと目移りしてしまいます。それぞれ好みのケーキを選んでもらうことができました。

さぁ、クリスマスのメインイベント、最後はお待ちかねのサンタさんの登場です。サンタさんが登場すると皆さんの目はくぎ付け、サンタさんに？いいえ、プレゼントにです。サンタさんがプレゼントを配り始めると、すぐに中を確認する方、あまり興味ないわぁ～という表情の方、自分の順番が待てない方とみなさん、それぞれの思いでプレゼントをゲット！したところでクリスマス会はお開きとなりました。サンタさんとした約束を守ってこれから一年、しっかりと頑張りましょう。それではまた来年！

旅行2018 コンプリート

ようこそ日赤奉仕団

数年ぶりに日赤奉仕団の皆さんがもちつきに来てくださいました。めったにつきたてのおもちは食べられないので、「もちつき」と聞いた利用者さんたちはわくわくしながら待っておられました。

興味津々な方たちは、誘われると奉仕団の方と息を合わせて餅をつかれていました。

おいしいお餅をありがとうございました。

親子旅行

毎年恒例の親子日帰り旅行を11月に各棟に分かれて実施しました。今年も沢山のご家族に参加いただき、一緒に美味しいお料理を食べたりしながら、楽しい時を一緒に過ごしました。

ご協力ありがとうございます

平成31年1月末現在

社会福祉法人椎の木会及び落穂寮の運営にご協力いただいた方に、この場を借りて御礼申し上げます。

今後も変わらぬご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

〈寄付金〉

シガ技研
湖南市東寺区
みすず税理士法人
吉川ちえ子
間宮信明
井島均

〈物品の寄付〉

㈱オージス総研
原田隆和
山本里子
平岩美晴
坂本フミ江
赤木一朗
大島正秀
伴野武
チェロコンサート出演者一同

（敬称略）

ありがとうございました。

泉

平成最後の年度も何とか終わりそうですが来年度は新しい元号でのスタートになります。色々と憶測はありますが、ローマ字表記の関係から、マ行（明治）タ行（大正）サ行（昭和）ハ行（平成）は見送られそうです。いずれにしてもポジティブなイメージを持つ漢字が選ばれるでしょう。さて、「躾（しつけ）」という漢字があります。「身」を「美」しく、という意味でしょうか、文字だけで見ればポジティブな言葉です。しかし、この言葉を隠れ蓑とした事件が度々起こされます。先日も「しつけ」と称した虐待と暴力で子供の命が失われる事件が起きました。使われる言葉によって、行為が軽く捉えられてしまうことは多々あるように思います。「万引き」は窃盗ですし、暴行・脅迫・恐喝といった悪質な行為が「いじめ」の一言で済まされてしまったりします。言葉と実際の行為に乖離はないか、誤魔化していないかを見直す必要があります。職員が行う「支援」は本当に相手を支えているのか、たすけとなっているのかを日々考えていきたいと思います。

木言（こと）

勝手に植えたから
無理に植え替えたから
そのまま放っておくから
毎年春に文句言われても
しらんよ

杉・檜より